



Title	土族語の下位方言
Author(s)	角道, 正佳
Citation	大阪外国語大学学報. 1988, 75(1-2), p. 49-63
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81174
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

土族語の下位方言

角 道 正 佳

Subdialects of Monguor Language

Masayoshi KAKUDO

Four main materials of Monguor language are compared in terms of long vowels, syllable final *l*, diphthongs and long vowels, diphthongization, front unrounded vowels, rounded vowels and the split of sibilants and we reached the conclusion that there are at least two comparatively different subdialects in the Huzu dialect of Monguor language.

0. はじめに

土族語とは中国の青海省、甘肅省に話されているモンゴル語系の言語であり、de Smedt と Mostaert によって Monguor 語と名付けられた言語である。⁽¹⁾ Monguor とは勿論 Mongol を現地風に訛ったものであることは容易に理解できるが、*o* を *uo* に、*l* を *r* に訛ることが、即ちこの言語(方言)の特徴であるかの如く誤解されてきたふしがある。しかし、Todaeva (1960, 1973) や Róna-tas (1962) の記述を総合すると、音節末の *l* が *r* になるのは土族語のうちの民和方言と那龍溝方言に限られていることがわかる。また、*uo* という二重母音も Todaeva (1973) の資料では必ずしも二重母音ではなく単母音に対応する語がかなりあり、照那斯図 (1981) では二重母音に対応する語は一語もない。

互助方言が長母音を保存しているという事実は有名であるが、席元麟 (1986) ではその事実を再検討する必要があるような記述がなされている。

1979 年以来、土族語の正書法を確立しようという動きがあり、既に『土漢対照語彙』等が出版されている。正書法というものの性質上、標準語の問題を避けては通れない。標準語として選ばれたのは、de Smedt と Mostaert, Todaeva らの記述した方言ではなく、互助土族自治県のほぼ中央に位置する東溝公社の方言である。照那斯図 (1981) は東溝大莊一帯の方言を記述したものであるが、『土漢対照語彙』の表記と付き合わせてみると、約一割、微妙な食い違いがある。

民和方言についてはごく僅かの資料しか利用できないけれども、Todaeva (1960, 1973) と照那

斯図、李克郁（1982）とでは微妙ではあるが、かなりの違いがある。

以上述べたような違いは単に地域方言の違い、表記上の精密さの度合い、音素の認定の仕方および各音の音素への帰属のさせ方の違いによるものに大別することができるであろう。以下これらの問題について述べていくことにする。

1. 土族語の方言

土族語が互助方言と民和方言という二大方言に分かれるという点については、諸学者の間に意見の相違はない。『土族簡史』ではさらに同仁方言を認めているが、この方言について詳細はわからない。魯長壽（1986：60）によると、黃南藏族自治州には保安語の方言を話す土族がいる。

互助方言の下位方言として、哈拉直溝（Khalci gol）、紅崖子溝（Fulan nuta, Fulan nara）、那龍溝（Narin gol）の三つの方言の名が記されていることが多いが、『土族簡史』ではさらに大通を加えた四つの下位方言の名が挙げられている。もっともこの最後の方言は、老人を除いて話者は少ないようである。これらのうち那龍溝方言⁽²⁾は de Smedt と Mostaert が記述している豊富なデータのある方言である。哈拉直溝方言は Todaeva や Schröder の記述した方言であり、やはり豊富なデータのある方言である。一方紅崖子溝方言⁽³⁾については Todaeva（1973）に極めて断片的なデータがあるにすぎない。以上の他に de Smedt と Mostaert（1964：vi,x）には、北大通より南西方面の大通河の右岸地域で話されている golong という方言の名が出ている。

魯長壽（1986：60）は互助方言の下位方言として、以上のものとはかなり違った東溝、大通、五十の三つの下位方言の名を挙げている。東溝、五十は哈拉直溝、紅崖子溝よりも北に位置する公社であり、大通は互助土族自治県の西隣りに位置する県である。したがって魯長壽の採り上げている互助方言は上述のものとは、地域的にくい違っているわけである。

民和方言を下位方言に分類した文献は見当たらない。照那斯図、李克郁（1982）の資料は民和県三川地区の官亭のものであるが、ほぼ同じ地域を調査したと思われる Todaeva（1960, 1973）の資料と比較すると、差は小さいとはいえない。

互助方言を記したものにさらに呂光天（1981）と席元麟（1986）がある。前者は精密さという点ではかなり問題を含んでいる。互助方言のどの下位方言を記したものが不明である。後者は互助土族県の東溝公社、東山公社、五十公社の方言に基づいている。

2. 表 記 体 系

de Smedt et Mostaert（1933, 1964）の表記は補助記号をたくさん付した精密表記であるが、帯気音を表す⁴、鼻母音を表す⁵は余剰的なので省略し、⁽⁴⁾無声化した有声音を表したスモールキャピタルを普通の小文字に換える。また長母音は母音を二つ並べて表す。さらに印刷の便宜を図って次

の括弧の中のような表記を用いることにする。G(G), ṣ(s), ṭṣ(TS), ɖʒ(DZ), ŋ(ng), u(U), ẹ(E), ē(EĒ)。ä と e はほぼ相補分布を成すが, Hattori(1972: 86) に述べられているような a と ä との対立を考慮して今は区別しておく。Hattori(1972: 87) は ē を /ai/ と解釈しているが, 長母音の特徴を明記するために, この解釈を採らないで EE と表記する。ついでながら, ū を /au/ と解釈することも可能なようであるが, やはり長母音の特徴を活かすために UU と表記する。Schröder の表記は, de Smedt et Mostaert の表記を簡略化したものであるが, 上述の表記に準じる。⁽⁵⁾ Todaeva のロシア文字を用いた表記は, 次の括弧中の表記に置き換える。a(a), б(b), в(v), г(g), ɣ(G), д(d), e(e), дж(dZ), дз(dz), i(i), к(k), к(q), л(l), м(m), н(n), ц(ng), о(o), п(p), р(r), r(R), с(s), т(t), у(u), ф(f), х(x), ʉ(tS), ш(S), j(y)。長母音は母音を二つ並べて表す。

照那斯図 (1981), 照那斯图, 李克郁 (1982), 席元麟 (1986), 吕光天 (1981) など中国の文献には IPA が用いられているので, 前者二つの表記を必要に応じて次の括弧中の表記に置き換える。g (g), ŋ (ng), ɕ(c'), ʒ(z'), tɕ(tc'), ɖʒ(dz'), ṭṣ(tS), ɖʒ(dZ), ə (E)。どういうわけか前の二つの文献では [g] は g で記してある。『土漢対照語彙』では拼音字母に基づいたローマ字が使われているので, 印刷上の不便はないため, そのまま表記する。

3. 各方言の特徴

各下位方言の特徴がよく現れた語をいくつか選び出して表にすると次のようになる。表の中で一の付いたものは, その文献に該当する語が記載されていないことを表し, 空白の部分は該当する語の有無が未確認であることを表す。() はその要素がある場合と無い場合とがあることを示し, / はその直前, 直後にある要素が自由交替の関係にあることを表す。例えば har(w)an は harwan 又は haran のことであり, hu/oni は huni 又は honi のことである。『土漢対照語彙』では ch, gh, sh, zh 等は単独の音を表す単一の要素である。

		A	B	C		D	E	F	
	モンゴル	互助	互助	互助	互助	互助	民和	民和	
	文語	東溝	東溝大莊	哈拉直溝	哈拉直溝	那龍溝		官亭	
		『土漢対照語彙』	照那斯图	Todaeva	Schröder	de Smedt et Mostaert	Todaeva	照那斯图李克郁	
1	a modun	moodi	—	moodi	moodE	moodi	mutu	—	木材
	b tabun	taawun	taavun	taaven	tawEn	taawEn	taben	—	五
	c siqaya-	sge-	—	sge-	sgee-	sge-	—	—	見る
2	a arban	har(w)an	xaran	xarvan	xaran	xarwan	xarbang	xarbang	十
	b ulayan	fulaan	fulaan	fulaan	fulan	fulaan	xulang	xulaang	赤い
3	qonin	hu/oni	xonE	xoni	xoni	xoni	qoni	qoni	羊
4	yal	ghal	Gal	Gal	Gal	Gar	GaR	Gar	火

5	a	ma ^y u	mau	mauu	muu	mo(o)	mUU	mau	—	悪い
	b	qay ⁱ Xin	haiq/ji	xaiidz'E	xeedZi	xedzi	xEEdZi	qaidZi	qaitc'i	鉄
	c	qoyina	hoino	xuaino	xueeno	xueno	xuEEEno	xoino	quaino	後
	d	oi	fu/ii	fuii	fee	fä	fEE	xoi	—	森
	e	kei	kii	kii	kii	ki	kii	kei	kEi	風
6	a	köke	kugo	kugo	kuguo	kuGuo	kuguo	kuko	—	青い
	b	nüke	nu/uko	noko	noke	nukuo	nokuo	—	nuko	穴
7	a	nis-	nesi-	nesE-	niesee-	niesE/e	niesE-	mese-	—	飛ぶ
	b	mönggün	mengu	menggu	mienggu	mienggu	miänggu	mienggu	menggu	銀
	c	nere	nire	nEre	nere	niere	niere	mere	—	名前
8	a	sibtige	xuuge	c'iuuge	Sibuge		Subuge	Sibuge	Subigi	錐
	b	oči-	xji-	sdzE-, c'E-	SdZi-	sdz' i-	sdz' i -	SdZi-	c' i-	行く
9	a	Yöb	job/d	dz'ob	dZo(b)	dz'tio(w)	DZuo	—	dZo	正しい
	b	jegüdün	juudin	dz'iuudEn	dZiuiden	dz'iudEn	dz'iuudin	dZiuden	dz'audung	夢
	c	juja ^y an	zhuzhuan	dz'udz'uan	dZudZaan		DZuDZuaan	dZudZang	—	厚い
10	a	čina-	qinaa-	tc'inaa-	tSina-		ts'inaa-	tSia-	tSina-	煮る
	b	čikin	qigi	tc'igE	tSigi	ts'igE	ts'igi	tSigi	tc'igi	耳

1 は長母音を保存しているかどうかを表したものである。Schtöder の表記には長母音が現れる語が極めて少ないが「木材」は明らかに長母音を示している。「木材」と「五」からわかるとおり、従来から言われてきたように互助方言は長母音を保存しているのに対し、民和方言は保存していない。1 c の「見る」は Schröder のデータでは長母音が記されているが、他のどの資料にも長母音を表記したものはない珍しい例である。

2 a の「十」は *p が全ての方言で x として現れることを示している。一方円唇母音の前では「赤い」が示すように、互助方言では f、民和方言では x が対応する。3 の「羊」が示す如く、*q は互助方言では摩擦音化しているのに対し、民和方言では閉鎖音を保存している。一方 5 e 「風」が示すとおり *k は全ての方言で閉鎖音を保存している。4 の「火」は互助方言では音節末のが l 保存されているのに対し、民和方言では r に変わっていることを表している。

以上の事実は全て既に指摘されている事柄であるが、以下に述べるような特徴は未だ詳しくは言及されていない。その理由は中国の最近の文献が、専ら互助土族自治県の中央部に位置する東溝周辺の方言だけに注目して、従来のデータとの違いを吟味していないからである。5 は二重母音の単純音化の程度が方言によって異なることを示したものであり、6, 7 は単純母音の二重母音化 (breaking) の程度が方言によって異なることを示したものである。長母音化、二重母音化とも那龍溝方言が最も顕著であり、哈拉直溝方言がそれに続き、東溝方言では 5 d の「森」を除いてこれらの現象が全く無いことがこのデータから窺われる。8, 9, 10 は舌尖を使う摩擦音及び破擦音の反り舌音化の程度が方言によって異なることを示したものである。*s, *ʃ, *ʒ が民和方言では反り舌音とそうでない音とに分かれるという事実及びそれらと互助方言との関係については、照那斯図、李克郁 (1982) からわかるが、互助方言内部での細かい対応に付いては未だ言及されていない。以下これらの事柄についてさらに詳しく検討していくことにする。

4. 長 母 音

de Smedt & Mostaert (1964: xi), Todaeva (1960: 72), 照那斯图 (1981: 86-87) 等で既に述べられている如く、互助方言は長母音を保存しているのに対し、民和方言は保存していない。達斡爾語、東部裕固語などとの比較において重要な役割を果たすのは勿論互助方言のほうである。ところで、哈拉直溝方言を記した Schröder の資料では、長母音を記した例は極めて限られており、互助方言の他の下位方言で長母音が現れる語の多くが短母音で記されている。これはインフォーマントである Guanbo-sdzia の発音の仕方にも原因があろう。Schröder (1959: 11) はドイツ語の有名な「菩提樹」の歌に譬えて、Am brunnen vor dem Tore da steht ein Lindenbaum を Ambrunnenvordemtore dasteht einlin denbaum のような吟じ方をすることがよくあったと述べている。このため長短の区別が時として非常に曖昧になり、上に述べたような結果になったものと思われる。したがって、長母音に関してはこの資料は適切でない。

吕光天 (1981) の互助方言を記した 165 語のリストのうち、長母音や二重母音を記したと思われるのは、ei を含む *tei-li* 「衣服」、*p'u-sei* 「帯」、*k'e-rei* 「鳥」、*stei-nama* 非常に早い」、*kwei* 「走る」の 5 語及び *ai* を含む *tu-lai* 「頭」、*moðai* 「蛇」のみであり、これ以外には長母音は記されていない。*p'u-sei* 「帯」は確かに互助方言の特徴を示しているといえる。「三」は *qərən*、「五」は *t'a-won* と記されている。⁽⁶⁾

以上のような理由で Schröder と吕光天の資料を除くと、互助方言について長母音の面で比較的豊富な資料を提供してくれるのは、『土漢対照語彙』、『土族語簡志』、Todaeva (1973)、de Smedt et Mostaert の四つである。この四つの資料で共通に長母音を含んでいる語のうち γ , g , y , b の脱落を含まない語を『土漢対照語彙』の表記で代表させると次のとおりである。*bii* 「不要」、*daigii* 「以前」、*daaha* 「子馬」、*daghaa-* 「従う」、*daalii* 「肩」、(ただし第一音節)、*daari* 「押す」、*deeren* 「四」、*dooli* 「舐める」、*dooro* 「下」、*duraasi* 「酒」、*gigeeen* 「明るい」、*huraa* 「雨」、*jilaa* 「鑑明」、*kidee-* 「横になる」、*moor* 「道」、*mulaa* 「小さい」、*muroon* 「河」、*namaan* 「霧」、*niqigoor* 「裸の」、*nogdoo* 「おもがい」、*ntiraa-* 「寝る」、*piile-* 「吹く」、*sgoo-* 「罵る」、*shdaasi* 「糸」、*taada* 「近い」、*taawun* 「五」、*toosi* 「油」、*unaa-* 「倒れる」、*xiraa-* 「あぶる」、*yaara* 「できもの」、*yoo-* 「縫う」。

『土漢対照語彙』のみ短母音のものが *ghuran* 「三」の一語あるが、派生語は全て *ghuraan* の形で載っているので恐らく誤植であろう。『土族語簡志』のみ短母音の語には *xumba-* 「泳ぐ」、*ula* 「足の裏」、*naGa* 「舅」、*tc'irGa-* 「剃る」の四語がある。全て第二番音節が他の資料では長い。 γ の脱落による語も含めるとさらに *nore* 「湖」が付け加わる。これらの語は誤植の可能性がある。Todaeva (1973) のみ短母音の語には、*bula-* 「埋める」、*buse-* 「帯」、*Gada* 「岩」、*dawa-* 「越える」、*duran* 「欲望」、*dZuri-* 「書く」、*jada-* 「疲れる」、*kurgen* 「女婿」、*noyjon* 「官吏」、*nor-* 「濡れる」、*xambura-* 「休む」、*tSina-* 「煮る」等がある。「書く」、「濡れる」が第一音節、その他は最終音節が他の資料では長い。 γ の脱落による語も含めるとさらに *nada-* 「遊ぶ」が付け加わる。これらの語も誤植の可

能性がある。de Smedt et Mostaert にのみ短母音の語は li「不」がある。しかし四つの資料のうちの二つが短い母音を示しているとなると、誤植の可能性は少なくなる。こういった語には次のような語がある。

	A	B	C	D	
1 bol-	ba/oli	olE-	ooli-	ooli-	になる
2 tergen	tirge	tErge	teerge	tieerge	車
3 beri	beerE	beerE	beri	bieri	妻
4 ĵida	jiidaa	dz'iida	dZida	dz'idaa	矛
5 bayan	bayaan	bayan	bayan	bayan	豊かな

1, 2 はA, Bで短母音, C, Dで長母音が対応する語であり, 3 は長短がちょうど逆になっている語である。4 の第一音節は 3 と同じであるが, 第二音節は 5 の第二音節と同様 B, Cで短く, A, Dで長い。A, BとC, Dとの間には少し方言上の開きがあるといえる。

Todaeva (1973) にのみ長母音が記されている語がある。avuu-「取る」, uroo-「入る」, uGuu-「与える」の三語であるが, いずれも動詞であり語幹末が長母音になっている。

席元麟 (1986) には i, ə, a, o, u という五つの母音 (以下Aグループ) 以外に ĩ, ǎ, ǣ, ǿ, ŭ という短母音 (以下Bグループ) が音素として認められている。B グループは短いと記されているが, Aグループは長いとも短いとも記されていない。ĩ は i よりも低く, ǎ は ə よりも低く且つ後方であり, ǣ は a よりも前方, ǿ は o よりも高く, ŭ は u よりも前方と記述されている。すなわちAグループとBグループとを一般的な音声学用語を用いて弁別することは困難である。tens/lax といった区別や舌根の位置の違いも考えられるが, 記述通り解釈すると非短母音/短母音ということになるだろうか。ここで問題になるのは, その解釈よりも中身のほうであって, 他の資料における長短の区別がAグループ/Bグループの区別とどういう関係になっているかということである。席元麟 (1986) は互助土族自治县東溝公社の大莊大隊, 洛少大隊, 白牙合大隊, 東山公社の寺爾大隊, 五十公社の寺灘大隊の発音に基づいているとの記述があるので, 『土漢対照語彙』や『土族語簡志』と比較してみるのが最も適当であろう。長母音は全てAグループに対応し, 一方Bグループは全て短母音に対応するが, 短母音でAグループに対応するものが数多く含まれている。ĩ が専ら tɛ, tɛ', ɕ の直後にしか現れないという点を除いて, いわゆる長短の区別が少しずれていることになる。この音素解釈に基づく, より豊富なデータの出現を待たなければ, 席元麟の意図するところが何であるのかにわかには判断できない。ǎ と ə は第 8 節で述べる類別とも対応しない。

5. 音節末の l

音節末の l が r になる方言は Róna-tas (1962) に詳しく述べられているように互助方言の那龍溝

方言及び民和方言である。この記述に付け加えるべきものは殆どないが、あえて次の二点だけ付け加える。その第一点は恐らくは誤植であろうが、Todaeva (1960: 74) には民和方言の例として altang「金」、helge「肝臓」という形が残っている。Todaeva (1973: 372) には aRtang「金」と出ている。⁽⁷⁾ Schröder (1959: 44) には Róna-tas (1962: 285) に述べられているように、sirgona「(頭を) 振る」(『土漢対照語彙』では xilgoo-「振り動かす」) という音節末の l が r になっている語が載っているが、Schröder (1959: 17-18) 自身も述べているように、音節末の l は保存されている。音節末の r は Todaeva の表記からもわかるとおり、r とは音声的に区別されるべきものである。de Smedt et Mostaert はその点を十分に認識した上で、この音をいわゆる r で表記している。照那斯図、李克郁 (1982) の民和方言の記述にはそういった説明はなく単に r で記してある。

付け加える第二点は呂光天 (1981) に見られる互助方言の記述についてである。音節末に限らず、互助方言の他の資料では l であるべき語が r になっているものが k'wa-ru「足」、rɔsɪ「麻」、ku-ku-rə「動く」、tɔ-run「七」、tɕ io-run「柔らかい」、xa-ron「熱い」、xɔ-rɔ-k (ママ)「遠い」、fɔ-rɔŋ「赤い」の 8 語ある。逆に xa-walu「鼻」のように r であるべき語が l になっているものもある。正しく l が記されている語は 3 語、正しく r が記されている語は 11 語 (ただし派生語を除く) ある。子音で終わっている語に母音が添加していたり、語末の母音が落ちたりしている語も多く見受けられる。

6. 二重母音と長母音

第 3 節で例に引いた「悪い」と同じ対応を示す語を『土漢対照語彙』の表記で代表させると、bau-「落ちる」、dau「歌」、tau-「追う」、jau-「噛む」、sau-「座る」、haujin「古い」等全てモンゴル文語の ayu を含んでいる語に対応する。しかしモンゴル文語の ayu を含んでいる語でも次のような対応を示す語がある。また ayu に対応しないけれども、「悪い」類とほぼ同じ対応を示す語もある。

	A	B	C	D	E	F	
1	ayuskɪ	oosigu	ooSgi	oosgi	—	—	肺
2	ɣayura	—	dZiooro	dz'iooro	—	dz'aura	間
	{ juure						
3	ɣayun	ndz'ong	dZiong	dz'ioong	—	—	百
4	qayul-	—	xooli-	xUULi-	—	—	走る
5	naɣur	noor	nuur	nUUr	—	—	湖
6	ɣalayu	dz'aliuu	dZaluu	dz'ialUU	—	dZalau	若者
7	sayulya	sauulGa	suulGa	sUUrGa	suRGa	—	水桶
8	ayula	ula	ula	ula	ula	ula	山
9	takiya	taGauu	taGuu	taGuu	taqu	—	鶏

1～3 はモンゴル文語の ayu に o(o) が対応する例である。4 は C だけが不規則、5 と 6 は A と

Bが不規則, 7はEだけが不規則な対応を示している。8は全ての方言でuに対応する語である。
9はEを除いて「悪い」類とほぼ同じ対応を示す。一方次のような規則的な対応をする語がある。

	A	B	C	D	E	F	
1	kirügen	qiruu	tc'irEuu	tSiruu	ts'ituu	—	鋸
2	küü	kuu	kEuu	kuu	kuu	ku	息子
3	segül	suul	sEuul	suul	suur	—	尾
4	suγu	suu	sEuu	suu	suu	—	腋
5	degüü	di/uu	diuu	diuu	diuu	diu	弟
6	bilegün	buliu	buliuu	buliuu	buliuu	—	砥石

以上のデータから、「悪い」類と「鋸」類は哈拉直溝方言と那龍溝方言で長母音, その他の方言で二重母音 (または長母音または短母音) という関係になっていることがわかる。この二つの類は Todaeva の資料でのみ同じ母音を持つが, この方言で本当に区別がないのか, Todaeva が聞き分けられなかったのか定かでない。同じことは次のような一連の語彙についてもいえる。⁽⁸⁾

	A	B	C	D	E	F		
1	bayi-	wai-	vaii-	vee-	bEE-	bang	—	ある
2	sayin	sain	saiin	seen	sEEEn	—	—	良い
3	sayiqan	saihan	saiiGan	seeG/xan	sEEGan	—	sGan	美しい
4	tayila-	taila-	taiiE-	teeli-	tEEli	—	—	外す
5	nayiman	na/iiman	naiiman	niiman	nEEman	naimang	naimang	ハ
6	gege-	gee	—	gee-	gee	—	—	捨てる
7	gegegen	gigeen	gEgeen	gegeen	gEgeen	gegeng	gegen	明るい
8	kegeli	keele	—	keelie	keelie	—	—	腹

1～5は哈拉直溝方言と那龍溝方言で長母音, その他の言で二重母音 (または長母音または短母音) という対応を示す語である。6～8は互助方言では全て長母音である。5を除いて Todaeva の資料では全て同じ母音で記されている。しかし民和方言では二重母音を保存しているが互助方言の全てで長母音になっている語もある。第1節の5eの「風」がそうであるが, さらに一つ例を付け加えると, モンゴル文語の dulei「聾の」がA～Fでそれぞれ, duli, dEli, duli, duli, dulei, dulai となっている。

以上の規則的な対応関係をまとめると次のようになる。民和方言が二重母音をいちばんよく保存し, 東溝方言がそれに続き, 哈拉直溝方言, 那龍溝方言は殆ど保存していない。そのうち那龍溝方言は母音の音価による区別が依然として残っているが, 哈拉直溝方言は Todaeva の資料に基づく限り, その区別も失っている。ただし Todaeva が区別を聞き分けなかった可能性もある。AのauがBのauuの簡略表記であるのと同様に, AのuuはBのEuuの簡略表記であろう。

	A	B	C	D	E	F	
ayu	au	auu	uu	UU	au	au	「悪い」類
egü等	uu	Euu	uu	uu	uu	?	「鋸」類
ayi	ai	aii	ee	EE	ai	ai	「鉄」類
ege	ee	ee	ee	ee	e	e	「明るい」類
ei	ii	ii	ii	ii	ei	Ei, ai	「風」類

7. 二重母音化

第1節の6, 7で示したように, 単純母音が二重母音化している語が哈拉直溝, 那龍溝の両方言に見られる。民和方言でもこういった二重母音化が見られるが, 資料が余りにも断片的なため, 互助方言についてのみ検討する。

哈拉直溝, 那龍溝の両方言で uo という二重母音を持っている語を Todaeva の表記で代表させると, kuguo 「青い」, kuguor 「おさげ髪」, loseGuong 「飢え」, nokuor 「友」, ngGuo 「顔色」, oluong 「多い」, soGuo 「斧」, fuguor 「牛」, xongGuor 「鐘」, Suguo 「いとすぎ」等がある。殆どが有聲の軟口蓋音か口蓋垂音の直後で起こっていて, 第一音節で起こっている語は全く無い。一方那龍溝方言には第一音節であると否とを問わず多くの語に二重母音化が見られる。有聲のみならず無聲の軟口蓋音か口蓋垂音の直後でも数多く起こっている。Todaeva (1973) で二重母音を持っている語は全て de Smedt et Mostaert でも二重母音を持っているが, その逆のケースは全く無い。したがって那龍溝方言でもっとも二重母音化が多く起こり, 哈拉直溝方言がそれに続くといった様子になっている。『土族語簡志』に xGuar 「短い」という例があるが, 一般に『土族語簡志』, 『土漢対照語彙』にはこういった二重母音は存在しない。呂光天 (1981: 513) には k'wa-ru 「足」という語が載っているが, これが二重母音化が起こっている唯一の例である。

ie ついても上に述べたのとほぼ同じことが言える。ただ uo の場合と異なるのは, ie のみならず iee も存在するということと, 哈拉直溝方言で第一音節でも二重母音化が起こっているという点である。起こる可能性のある位置は, de Smedt et Mostaert の表記で表すと dz, s を除く舌尖音 (齒音, 齒茎硬口蓋音) 及び唇音の直後である。軟口蓋音か口蓋垂音の直後では起こらないので uo になる可能性のある条件と ie (e) になる可能性のある条件とは直前の子音の面ではほぼ相補的な関係になっている。dz', tc', s' の直後の i は介入音という解釈もできるかもしれない。ただし, Todaeva の場合は dZ, tS, S の直後に常に i が介入音として存在しているわけではない。Todaeva の資料では m の直後で二重母音化が起こっている例はあるが, p, b の直後で起こっている例は無い。したがって舌尖音の直後で最も起こり易いと言えるであろう。哈拉直溝方言で二重母音化が起こっている語是那龍溝方言でも起こっているが, その逆のケースは無い。『土族語簡志』, 『土漢対照語彙』にはこういった二重母音は全く無い。

uo が第二音節以下に現れるのは, 先行する円唇母音の存在を前提とするが, その母音は o でも

u でもよい。de Smedt et Mostaert では g の直後では本来二重母音が期待されるはずであるが、そうでない場合は e になっているという事実が興味深い。『土族語簡志』には uo という二重母音はないが、ua という二重母音はある。また de Smedt et Mostaert で uä という二重母音が現れる語がある。

	A	B	C	D	E	F	
1 oqor	hughor	xGuar	xuGor	xuGuor	xuGor	—	短い
2 künggen	kongon	konggon	konggen	kuongguän	menggend	kongges	軽い
3 nüke	no/uko	noko	noke	nokuo	—	nuko	穴
4 üge	ugo	ugo	uge	uge	uge	—	語
5 sihüge	xuuge	c'iuuge	Sibuge	Subuge	Sibuge	Subigi	錐
6 jirtike	jirge	dz'irge	dZirge	dz'irge	dZirge	dZurgi	心臓

1 は A で ua が現れている例であり、2 は D で ua という二重母音が現れている例である。4, 5 は D で二重母音化が起こっていてもよさそうであるが、実際には起こっていない。6 はモンゴル文語には円唇母音があるが、土族語の互助方言では円唇母音が残らないということから、二重母音化が起こる条件を満たしていない。

8. 『土族語簡志』の E 及び Todaeva の e に対応する母音

A, B, C, D で認定されている母音の数は大きく違うが、長母音、二重母音を別にとすると、とくに問題になるのは i と a を除いた非円唇の短母音である。四つの資料で複数個以上の対応の見られる語を類別すると次のようになる。

類	モンゴル文語	A	B	C	D
1	u, ü, ϕ	i, u	E	u	u
2	a, u, ϕ	i	E	a	i, (a)
3	i, u, ü, e, ϕ	i	E	i	i
4	e?	i	E	e	i
5	?	i, (u)	E, (u)	e	E
6	e	e	e	e, ie	e, ie, ä, iä

1 類は大部分がモンゴル文語で u に対応する語であり、B では 2～5 類の母音と中和してしまっているためにこういった表記になっているものと思われる。A の表記では i と u とが共存している語もある。また l, n, d, s の後では u が現れることが多い。A の表記で代表させると、dulii 「壺の」、l /numu 「弓」、sumu 「矢」の第一音節及び furi 「下へ」、ghordin 「速い」、hanaadu 「風邪」、nuri/u 「腰」、padi 「堅実な」、suri- 「学習する」、の最終音節の母音がそうである。

2 類はモンゴル文語で a, u もしくは ϕ (ゼロ) に対応する語が含まれる。C においてのみ a が対応する。A の表記で記すと、budi- 「染める」、ghadim 「親戚」、ghari- 「出る」、naadi- 「遊ぶ」、

tuli- 「支える」等の例がある。C, D 共に a が現れる語に li/agma-「区別する」がある。

3 類は例が非常に多い。モンゴル文語で各種の母音に対応するが、最も多いのは i に対応する語である。該当例が多いのは A~D の全ての資料で i になる語が、語頭及び [t_ɕ, d_ʒ, ʧ] の直後に限られているからである。つまり B の資料で i が現れるのがこれらの子音の直後に限られているためであり、その他の i の多くが B の資料では E になっているためである。foodi 「星」, honi 「羊」, i/udi- 「病む」, oli- 「得る」等の最終音節及び kile- 「言う」, timeen 「ラクダ」等の第一音節に現れる。

4 類は第一音節の場合はモンゴル文語で ge, ke, ne で始まる語のうちの一部に対応する。第二音節以下の場合はモンゴル文語との対応関係は様々である。A の表記で代表させると, dide 「男」, gidesi 「腹」, nimee- 「加える」の第一音節, ghadim 「夫, 妻の親戚」, juudin 「夢」の第二音節等の例がある。

5 類は s, z の直後に現れる [ɪ] で表されるべき音の全てが該当し例は非常に多い。nasi 「年令」, qas/zi 「血」, sunosi- 「聞く」, yasi 「骨」, 等の最終音節の母音がそれである。さらに, dire 「上」, kiree 「烏」, ntiraa- 「寝る」の第一音節もそうである。一部の語では, duraasi 「酒」, taawun 「五」のように u に対応する語もある。

6 類の語はモンゴル文語の e に対応する語である。D で ä もしくは iä になるのは鼻音の直前にある場合であり, iä になるのは直前に S 以外の舌尖音が有る場合, ä になるのはそれ以外の子音が直前にある場合である。iä の場合は直前に dz' がある場合は udz'iä- 「見る」のように鼻音が後続していないこともある。樋口 (1983: 80) には ä を /a/ の異音とみなしうるという趣旨の主張があるが, 6 類に現れる語の ä 及び iä は明らかに /e/ の異音とみなすべきである。樋口の趣旨に従うと鼻音の前で前よりの変種になると記述せざるを得ないが, これは不自然である。鼻音の前で口の開きが大きめの変種になると記述する方がはるかに自然である。もっとも Hattori (1972: 86) のような例があるので, 全ての ä, iä が /e/ に帰属できるかどうかはさらに検討を要する。ger 「家」, jige 「ろば」, ken 「誰」, ndige 「卵」, shge 「大きい」等の例がある。

4~6 類のモンゴル文語の e に対応する語は A, B では 4, 5/6, D では 4 /5 /6 というふうに類別化されている。すなわち A, B では 5/6 の間で分化が起こり, D ではさらに 4/5 の間でも分化が起こっていることになる。D の例から引けば, gidiesE 「腹」/gEgeen 「明るい」/ger 「家」というように語頭の g の後で三種類の母音が対立していることになる。この分化の起こった条件はよくわからない。一方 B ではモンゴル文語の e に対応する E と e はその現れ方にある程度の傾向がある。単音節語は原則として e が現れ, 語末や語幹末には e が現れることのほうが多い。

B の資料では xelge 「肝臓」の第一音節のようにモンゴル文語の e に対応するけれども, A, C, D の表記でそれぞれ halge, xe/alige, xaliege となっているような語もある。また B の neeten 「湿った」の第二音節は A, C, D で規則的な対応を示すが, モンゴル文語の e には対応しない。

モンゴル文語の e に対応すると否とにかかわらず, C では 4~6 類が中和している。第 6 節で述べた長母音と同様, ここでも Todaeva が区別を聞き分けなかった可能性がある。また第 4 節で述べ

た席元麟（1986）の *о* と *у* の区別は以上の類別ときれいには対応しない。

9. 円唇母音

円唇母音の対応に基づいて類別してみると次のようになる。

類	モンゴル文語	A	B	C	D	
1	о, ӧ	u	o	u	u, uo	「所」
2	o	u	u	o	o	「多い」
3	?	o	o	u	o, uo	「熱い」
4	u	o	u	u	u	「速い」
5	ü	o	u	o	o	「着る」
6	o, u	u	o	o	o	「三十」

1 類は B だけが *o* になっている語である。A の表記で代表させると, *ugho*- 「与える」, *uro*- 「入る」, *urong* 「場所」, *urosi*- 「流れる」, *sunosi*- 「聞く」, *tughoo* 「鍋」, の第一音節がそうである。2 類は A, B が *u*, C, D が *o* になっている語である。*sughor* 「盲の」, *ulong* 「多い」の第一音節がそうである。3 類は C だけに *o* が現れる語であり, 第二音節に限られる。*halong* 「熱い」, *longho* 「瓶」の第二音節がそうである。4 類は A だけに *o* が現れる語であり, *ghordin* 「速い」という例がある。5 類は B にのみ *u* が現れる語であり, A の表記を用いると, *musi* 「着る」の第一音節がそうである。6 類は A だけに *u* が現れる語であり, *hujin* 「三十」, *hurin* 「二十」, という例がある。

6 類についてはデータがないので不明であるが, Todaeva の資料によると民和方言では 3 類を除いて C と同じ対応をしている。C と D とはほぼ同じ対応をしているといえるであろう。只一つの方言だけで別の対応をしていて, しかも例の多くない 3～6 類を別にすると, 1 類の *o* という母音が B の方言の特徴かもしれない。

呂光天 (1981) には [*o, ɔ, u*] の三つの母音が区別されているが, 上に述べた類別とはきれいに対応しない。

10. 舌先摩擦音及び破擦音

民和方言で **j*, **ɬ*, **s* が反り舌音とそうでない音に分化している事実が, 照那斯图, 李克郁 (1982) のデータから読み取れるが, その分化の条件については例が少ないためよくわからない。この節で問題にするのは, 互助方言の下位方言 A～D における対応関係である。A～D の対応関係に Hattori (1972), Schrödar (1959, 1964, 1970) の表記も併せて記すと次のようになる。

類	モンゴル文語	A	B	C	D	Hattori	Schröder
1	s	s	s	s	s	s	s

2	s	x	c'	S	s'	s	s	[dz,i] の前
3	s	x	c'	S	S	ʃ	ʃ	i以外の母音の前
4	s	sh	S	S	S	ʃ	ʃ	[dz] 以外の子音の前.
5	ʃ	z	dz	dz	dz	z	z	借用語
6	ʃ	j	dz'	dZ	dz'	z	z	
7	?	zh	dZ	dZ	DZ	ʒ	dʒ	一部の円唇母音の前
8	?	r	Z	?	Z	ʒ	ʒ	借用語
9	?	c	ts	?	ts	c	ts	主に借用語
10	ʈ	q	tc'	tS	tc'	cts	ts	
11	ʈ	ch	tS	tS	TS	ʈ	tʃ	借用語

Hattnri と Schröder はDの表記を簡略化したものであり、1 と2, 5と6, 9と10は同一音素の異音であると解釈しているわけである。この見方は2, 6, 10の子音の直後に常に i があることが前提となる。しかしA, Cの表記では必ずしもそうっていない。Dにおける2, 3の区別はA, B, Cでは区別されていない。

2類はDの表記を用いると s'ira「黄色い」, s'iree「机」, s'iruu「土」のように i の前及び sdz'i-「行く」, sdz'ang「フェルト」, sdz'ün「娘」のように語頭で dz'に後続されるときに現れる。3類は主に Sawar「粘土」, Sulong「夜」のように i 以外の母音の前、4類は Sge「大きい」, Sde「早い」, SdzEn「九」のように語頭で dz' 以外の子音に後続されるときに現れる。なおDの SEmu-「吸う」, SängGän「薄い」, Suu「鳥」に対してBのc'imu-, c'inggen, c'iuuのように母音自体が違っている語もある。大事な点はDでは i 以外の母音の前では反り舌音が現れるのに対してA, Bでは反り舌音になっていないということである。Cでは2～4類が区別されていないので詳細はわからない。

5～8類のうち5, 8類は借用語に現れるので除くとCで6～7類の区別がないこと以外はきれいに対応している。Dの表記を用いると nDZuwa「客」のように u の直前で7類が現れる。しかしどういうわけか DZuDZuaan「熱い」のD Zは二つ共Bでは dz'になっている。

9～11類のうち9, 11類は借用語に現れるので除くと、Cで10～11類の区別がないこと以外きれいに対応している。もっともDの tsEdzE「血」のように他の資料とは対応しない語もある。

11. お わ り に

以上主として互助方言の下位方言の違いについてみてきた。これら以外にも検討しなければならない点が多い。然も通時的な面からの考察が必要である。とくに *e, *o が高母音化していく過程とC, Dにおいて二重母音化していく過程及びその時間的な前後関係を詳細に検討する必要がある。

民和方言についてはデータ不足から十分な検討はできなかったが、最後に互助方言と民和方言とを区別する重要な要素をもう一点述べておく。それは Hattori (1972) の第7 節 5) に定式化されている変化⁹⁾が民和方言では互助方言に比べて起こり方が少ないということである。例えば

Todaeva (1973) の表記に基づけば, aRtan 「金」, qatong 「固い」, dotoR 「中」等の t 及び taqu 「鶏」の q, さらに tose 「油」, tSimese 「爪」, tSaRse 「紙」等の s のように互助方言では有声化しているものが民和方言では無声音として保存されているという点である。⁽¹⁰⁾

註

- (1) 民族名については, Schröder (1964:143) に自称として ts'iGan, mongGuol, monGuol kun, 他称として, タングート人から Karlong, rGya hor, 中国人から T'u-jen (即ち「土人」), ヨーロッパ人からは Przewalski らによって Dalden, Dolden, Daldy, そして Huc と Gabet によって Dchiahour と記されているという事実が載っている。

Potanin (1950:374-375) には, 三川では自称が tSagan mongol であり, モンゴル人からは dalda, doldo, さらに dolon xeletei doldo (七枚舌のドルド) 等と呼ばれていると出ている。

『土族簡志』には自称としては, 互助, 大過, 天祝では「蒙古爾(mongol)」, 「蒙古爾孔(mongol kun)」, 「察汗蒙古爾(qagan mogol)」, 民和三川地区では「土昆」, 甘肅省卓尼地区では「土戸家」といい, 他称としては藏族から「霍爾(hor)」, 漢, 回族からは「土人」, 「土民」と呼ばれ, 漢文史書には「西寧州土人」, 「土民」として現れ, 解放後は「土族」と呼ばれることになったという説明がある。

- (2) de Smedt et Mostaert の調査した那龍溝は調査した時は甘肅省に属していたが, 現在は青海省になっている。
- (3) 音声, 音韻面での他方言との違いはよくわからない。Todaeva (1973:137) の表18によれば, 分離副動詞に -aa と共に -eed のように d が付いた形が現れることや, 非分離副動詞 -nengge, 限界副動詞 -dalangge, -dange のように ngge が付いた形が現れるなど, 哈拉直溝, 那龍溝方言と違っているものがある。
- (4) 口蓋化を表す 'も de Smedt et Mosoart の表記に関する限り余剰的であるが, 第10節で検討する事柄との関係であえて余剰性を残した表記にする。
- (5) Schröder の表記では de Smedt et Mostaert の e, ē, g, ŋ をそれぞれ ɛ, ɛ̃, ɣ, ŋ で表してある。
- (6) 呂光天 (1981) では a と a, s と S, s と S, g と g 等が区別されているが, 一方は誤植であろうか。また t' に対する t, d', d の区別とか, k に対する k, q, g, g, r の区別のような不必要な区別をしている。u, o, ɔ が区別されているが, 第9節で述べる類別とは対応しない。1と2は区別されていない。ʔ も現れる。- が付されている語とそうでない語とがあり, その一部が音節の境に対応すること以外実体はよくわからない。
- (7) Todaeva (1973) のデータにも転記上の間違いが非常に多い。
- (8) 第二音節以降に現れる ai は次のような対応を示す。

モンゴル文語	A	B	C	D	E	F	
moyai	moghoi	moyuai	muɣuee	mUɣuEE	muɣui	moyai	蛇
toloyai	tolghoi	tolɣuai	tolɣuee	torɣuEE	torGui	taryai	頭
soloyai	solghoi	solɣuai	solGuee	sorɣuEE	sorɣui	—	左
noqai	nohoi	noxuai	noxuee	noxuEE	noqoi	—	犬
toqai	tughoi	tuGuii	tuGuii	tuGuii	—	—	肘
taulai	toolii	toolii	tuulii	tUUIii	tuli	taulai	兎
dalai	dalii	dalii	dalee	dalEE	—	—	海
qormai	hurmi	xormii	xormee	xormEE	xormei	—	裾
manglai	manglii	manglii	masglii	masglii	—	manglai	額
čirai	qiree	—	tSirii	ts'irii	—	—	顔
qayulai	hoolo/a	xoolo	xoolo	xoolo	—	—	喉
malayai	malgha	malga	malga	marga	maRga	—	帽子

互助方言については第5節で述べたのと同様, A, B と C, D との間には少し方言上の開きがあるといえる。

(9) Hattori (1972: 81) の定式化は、大体次のようなことを言っている。通常語頭の p, t, č, k, q, f, s, š, x (これらのあるものはモンゴル祖語の lenis に由来する) の後で、語末にない (*b, *g, *γ, *l, *r) + *t, *č, *k, *q, *s (š は除く) が有声化する。

民和方言のデータが少ないのでよくわからないが、この条件は少し手直しが必要であろう。

(10) 照那斯図, 李克郁 (1982) では artang 「金」, tosi 「油」, tSarsi 「紙」のように記されている。「ナイフ」は Todaeva (1973) では tSitoGo となっているのに、照那斯図, 李克郁 (1982) では tc'idoGo というように有声音になっている。なお照那斯図 (1981: 7) によれば, s は互助方言でも有声と無声が自由交替しているようである。

参考文献

- 《互助土族自治县概况》编写组 (1983) 『互助土族自治县概况』青海人民出版社
- 魯長壽 (1986) 「大力試行土族文字提高文化水準」中国民族語言学会編『中国民族語言論文集』四川民族出版社 58-66
- 呂光天 (1981) 「青海土族的語言與來源關係」呂光天著『北方民族原始社会形態的研究』寧夏人民出版社 507-522 (初出は1955年第三輯『中国民族問題研究集刊』)
- 《土族簡史》编写组 (1982) 『土族簡史』青海人民出版社
- 照那斯図 (1981) 『土族語簡志』民族出版社
- 照那斯図, 李克郁 (1982) 「土族語民和方言概述」《民族語文》編輯部編『民族語文研究文集』青海民族出版社 458-487
- 席元麟 (1986) 「土族語音位系統」中国民族語言学会編『中国民族語言論文集』395-405
- 互助土族自治县民族語文辦公室翻印 (1982) 『土漢对照語彙』互助土族自治县
- 喻世長 (1983) 『論蒙古語族的形成和發展』民族出版社
- 服部四郎 (1959) 「蒙古祖語の母音の長さ」『言語研究』第36号 40-54
- 樋口康一 (1983) 「チベット語と土族語の言語接触について」『チベット文化の総合的研究』(昭和57年度特定研究報告書) 76-84
- 樋口康一 (1984) 「書評 喻世長『論蒙古語族的形成和發展』, 1983 民族出版社, 97頁」京都大学言語学研究会『言語学研究会『言語学研究』第3号 117-136
- Hattori Sirō (1972) 'Initial Plosives of Proto-Mongolian and Their later Developments - With Two Additional Remarks -', 『言語の科学』第3号 63-92.
- Róna-tas, A. (1960) 'Remarks on the Phonology of the Monguor Language,' *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* X/3, 263-290.
- Róna-tas, A. (1962) 'On Some Finals of the Monguor Language,' *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* XIV, 283-290.
- de Smedt, A. et A. Mostaert (1933) *Le dialecte monguor parlé par les mongols du Kansou occidental*, III^e Partie, Dictionnaire monguor-français, Imprimerie de l'université Catholique, Pei-p'ing.
- de Smedt, A. et A. Mostaert (1964) *Le dialecte monguor parlé par les mongols du Kansou occidental*, II^e partie, Grammaire, Mouton & Co., The Hague.
- Schroder, Dominik (1959) *Aus die Volksdichtung der Monguor*, 1. Teil, Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- Schroder, Dominik (1964) 'Der Dialekt der Monguor,' *Mongholistik*, Leiden/Koln E.J. Brill, 143-158.
- Schröder, Dominik (1970) *Aus die Volksdichtung der Monguor*, 2. Teil, Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- Schröder, Dominik (1980) *Geser Rēdzia-wn*, Dominic Schröders nachgelassene Monguor (Tujen) . Version des Geser-Epos aus Amdo, Otto Harrossonirz, Wiesbaden.
- Потанин, Г. Н. (1950) Тангутско тибетская окраина Китая и центральная монголия, Государственное издательство географической литературы, Москва
- Тодаева, Б. Х. (1960) Монгольский языки и диалекты Китая, Москва.
- Тодаева, Б. Х. (1913) Монгорский язык, Издательство «наука» главная редакция восточной литературы, Москва.

1987年11月30日